

今から13年前に、当時先進五か国といわれた日本、アメリカ、イギリス、フランス、西ドイツの五大国の学者が協力して、一つの共通知能テストをつくりました。この中心になったのはイギリスのケンブリッジ大学教授のリチャード・リン博士です。

その共通テストで五か国の子どもの知能を測定したところ、日本の子どもの知能がズバ抜けて高いという結果が出ました。他の四か国の子どもの平均知能指数は100だったのですが、日本の子どもは111でした。知能指数で11もの差が出るのは大変なことだということで、イギリスの科学専門紙『ネイチャー』に発表されました。ヨーロッパやアメリカの学者は、どうして日本人の子どもの知能が高いのかと疑問を持ちました。日本の子どもだけが飛び抜けて高いということは、日本特有の何かがあるに違いないといろいろと考えた結果、「漢字」に行き着いたのです。そして、どうして漢字が頭の働きをよくするかという研究に取り組んだのです。

角田忠信という方が書かれた『日本人の脳』という書物があります。これも『ネイチャー』に「日本人の脳」という論文として発表され、話題になった本です。この本で、角田忠信さんは、日本人の脳は、世界のいずれの人間の脳とも違う構造を持っているということを発表したのです。日本人の脳に限って、鳥の声や虫の声を左の脳で聞いているということを実証したのです。

言語脳というのは左にあります。脳梗塞などで左の脳を損傷すると言葉が不自由になります。また、たとえば、時計を出してこれは何時と聞いても正確に答えられません。時計がどんな働きをするかということはいくらでもわかりますが、時間を読み取ることができないのです。

このように言語は左脳でつかさどります。音楽やその他の音は右脳で聞きます。つまり言語だけが左の脳で受け止めて、あとのすべての音は右の脳が処理するのです。ところが、日本人の場合は言葉だけではなく、鳥の声なども左の脳の一部で聞いていたのです。このことが脳の発達を促したというのが、ヨーロッパやアメリカの学者の見解のようです。ただし、これは日本語を母国語として話す日本人に限るようです。日本人の両親の間に生まれた子どもでも、ヨーロッパで生まれてヨーロッパで育ち、英語やドイツ語を聞いて育つと違います。その場合、言葉以外の音は、イギリス人やドイツ人と同じように右の脳で聞くのです。とすると、日本語が鳥の声や虫の声を左の脳で聞く脳をつくっていったわけですね。

つまり日本語という言葉によって、日本人の脳はつくられるということがはっきりと証明されたのです。こう考えると、子どものIQの差も含めて、漢字が日本人の脳を他の民族と違うものにしたということになります。同じ日本語でも、“かな”はアルファベットと同じで表音文字にすぎませんから、漢字にその原因があると各国の学者が考えたわけですね。